イギリス農業革命はどのようにとらえられるべきか
――プロザロウ再読――

國　方　敬　司
（人文学部　法経政策学科）

山形大学紀要（社会科学）第44巻第２号別刷
平成26年（2014）２月

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

イギリス農業革命はどのようにとらえられるべきか
――プロザロウ再読――

國 方 敬 司
（人文学部　法経政策学科）

Ⅰ　はじめに

拙稿「イギリス農業革命研究の陥穽」において簡略にではあるが研究史について触れて，いまや「農業革命」が歴史概念としてはほとんど内容のない無規定な概念である，と考えられるようになっていることを指摘した。すなわち[1)]，

> こうした研究の多様化ないしはさまざまな学説の展開は，相互に相容れない農業革命概念の主張に帰結することになり，ついには農業革命概念そのものの有効性に疑念が呈されることになる。サースク（Joan Thirsk）は，ケリッジの主張を紹介しながら，1750年から1850年の農業革命と結びついている技術的な進歩はそれよりも200年も前に始まっていたのであって，際限のない論争を終結させるには「農業革命」なる概念を放棄して，連続するものとしての改良（improvements）を分析するべきである，と提案している。

このサースクの提言は一見もっともなように思われる。が，研究史をきちんと整理した上でも首肯しうる提言なのであろうか。というのは，農業革命の研究史を繙くと，プロザロウ（Prothero, Rowland E.）やトインビ（Toynbee, Arnold）の名前がその始祖として挙げられる[2)]。しかしながら，かれらがどのような意味で“Agricultural Revolution”あるいは“Agrarian Revolution”を使用していたのか，という点になると必ずしも充分に吟味されているわけではないように思われる。

本稿では，この点をきちんと整理しないでイギリス農業革命について論争されている状況から「農業革命」概念の混乱がおきていると考え，プロザロウの業績を検討する。この検討を通じて「イギリス農業革命」をプロザロウがどのように理解していたのかを明らかにする。先回

1）拙稿「イギリス農業革命研究の陥穽」（『山形大学紀要（社会科学）』第41巻２号，2011年２月）40頁。Thirsk, Joan, *England's Agricultural Regions and Agrarian History, 1500-1750,* Macmillan Education, 1987, pp.56ff. を参照のこと。

2）小松芳喬氏は，著書『イギリス農業革命の研究』（岩波書店，1961年）の中で，「農業革命」はマルクスによって使用されているが，最初の使用者かどうかは判断できる資料がない，と指摘している（１頁）。本稿の関心は，誰が最初の使用者であったか，という点ではなく，現在に至るイギリス農業革命研究に影響を与えたという意味での始祖，プロザロウやトインビの概念はどのように構成されていたのか，という点にある。本稿では，とりわけ影響力の大きかったプロザロウに的を絞って検討する。

りしていえば，検討すべきは，プロザロウが明示的に記す「農業革命」の規定ではなく，かれ自身が重要な歴史事象として記述しながら概念構成に組み込まれなかった事象の把握である。この点こそが,「イギリス農業革命」を理解するための眼目であると考える。その点を指摘した上で,「農業革命」が歴史概念としていまでも有効な分析概念であることを示すことにしたい。

なお，これからの検討は，“Agricultural Revolution”あるいは“Agrarian Revolution”といったキーワードを中心に吟味するものであって，プロザロウの著書の忠実な紹介を企図するものではない。誤解を生まないためにこの点を予めお断りしておきたい。

Ⅱ　*The Pioneers and Progress of English Farming*

プロザロウの農業革命論の出発点は，‘The Pioneers and Prospect of English Agriculture’, *Quarterly Review,* Vol.159, 1885と思われるが，この論文では，“Agricultural Revolution”ないしは“Agrarian Revolution”なる用語は使用されていない。この論文を土台として執筆されたのが，1888年にLongmansから上梓された*The Pioneers and Progress of English Farming*（以下，本文では『イギリス農業の先駆者たちと進歩』とする）である。この著書では，プロザロウは「農業革命」を使用している。たとえば，中世における開放耕地制の下では領主直営地と農民の共同耕地がともに細分化された地条として混在し耕作されていたために，両者の区別がつかなくなってしまうという話からつぎのように展開する[1)]。

> この理由からFitzherbertは，*Book of Surveying*において，精確さの必要を測量士に強く意識させた。「いかなる地片も一方的に失われたり，横領されたり，侵害されたり」しないように，と。しかし，1450年と1560年とのあいだに，1つの農業革命（an agricultural revolution）が成し遂げられた。それは，自給自足農業から利潤獲得の農業への変化として，共同所有から個別所有への変化として簡潔に述べられるだろう。
>
> マナ領主がかれらの荒蕪地を囲い込んだり，領主直営地を農地制度上の協力関係から引っ込めたり，あるいは，村落共同体の構成員が耕地の共同用益権を消滅させることに意見が一致したりしたときに，この変化における第一歩が踏み出されたのである。……（後略）……（強調点，國方）

同じ第II章「利益のための農業」でプロザロウは，さらに，イングランド毛織物工業の勃興と大陸の毛織物工業による羊毛需要の高まりという文脈でつぎのように述べる[2)]。

> 牧羊の安定した高利益は，保有地の併合（consolidation）のみならず，農業慣行（agricultural practice）において１つの革命を促進した。従来は，ほとんど牧場には関心が払われてこなかっ

1）Prothero, Rowland E., *The Pioneers and Progress of English Farming,* Longmans, Green, & Co., 1888, p.18.
2）*Ibid*., p.22.

た。いまや耕地が牧草地に取って代わられる。新しい商業的貴族層は，かれらの土地を狩猟場（park）ないし牧羊場（sheep-walk）に転換するが，そこではようやくひとりの羊飼いが働き口を見いだすだけだった。

ここで指摘されている農業革命とは，明らかに第一次囲い込み運動とそれと連動した羊毛生産への転換のことである。しかし，イギリス農業革命研究に決定的な影響を及ぼした1912年公刊の*English Farming Past and Present*（以下，本文では『イギリス農業 過去と現在』とする）では，農業革命といった用語はこの文脈では使用されていない。小松芳喬氏が指摘するように，第一次エンクロウジァを強調する「農業革命」概念は，マルクス（K. Marx）やアシュリ（W. Ashley）の影響の下形成されたものである[3)]。プロザロウにしても，19世紀末の経済史研究の流れの中で，当初はこの現象を「農業革命」と理解したのであろうが，『イギリス農業 過去と現在』の執筆段階になると，使用しなくなっていることに留意したい。

ともあれ元に戻ると，18世紀の農業について論じる章において，直接「農業革命」に触れているわけではないが，きわめて重要な論点が提示されているので紹介する。すなわち[4)]，

製造業の急速な発展は，製造業の農業からの完全な分離を惹き起こした。手工業への機械の適用は，社会編成（social arrangements）上の革命を完成させた。分業は経済的必然になったのである。農場経営者（farmer）と職工（artisan）とは互いに依存するようになった。物々交換ではもはや事足りなくなり，貨幣が絶対に必要になった。耕作に必要な粗末な用具，あるいは日常生活の快適さに必要な家事道具は，これまで家で作られていた。……（中略）……耕作者がかれらの収入を増やしたり，生産物を売却する必要から免れたりするための家内工業すべてが，いまや製造業に取って代わられた。……（中略）……工業製品の安さが，農場経営者の製造業者への依存を促進した。２つの産業の分離は，両者の成熟には必須である。大部分の労働者階級の農業からの離脱を伴った，人口の途轍もない増大は，土地資源の途轍もない開発を要求した。小規模農場経営者と自作農（peasant occupier）は，改良に対する絵に描いたような障害物となり，かれらの除去は必要かつ必然であった。

ここにみられるプロザロウの認識は，工業化の急速な進展が農業と工業を分離し，農業における産業としての純化を促進したというものである。その上で，農業の発展のためには小農場経営者と自作農の没落は必然であったとの認識である。強調すべきは，プロザロウによる農業生産進展の把握は，こうした認識の枠組みの中で検討されたものであったことである。単なる農業生産の上昇や農法の転換を解明していたわけでなく，農工分離の進展という枠組みのなかでの農法の転換の分析であったのであって，“Science with practice, 1812 to 1845”と題した第X

3）小松，前掲書，2頁。
4）Prothero, *The Pioneers and Progress*, pp.67-68.

章で，ナポレオン戦争後の農業不況の時代についてつぎのように指摘する[5]。

> 軽土地帯の農場経営者は比較的ほとんど被害を被っていない。［農産物の］価格は低い。しかし条播農業をはじめとして人工肥料，よりよい輪作，牛と羊の品種改良の普及が，かれらに利益のある農業を可能にした。よい機械が悪い機械を駆逐しつつあった。50年前は，粘土質土壌地帯（clay land）が穀物と牛肉の生産地であって，ノーフォクの軽土地帯は耕作されていなかった。いまや役割は逆転した。この農業における革命は主としてカブによってもたらされたのであり，排水設備［の敷設］のみが粘土地帯の農場経営者をして［軽土地帯の］競争相手と対抗せしめた。（強調点，國方）

この記述のあと，3頁半ほどにわたって排水技術に関しての説明が綴られる。この問題については紹介を割愛する。それに引きつづいて今度は，「排水設備は主として１種類の農場経営者を助けたが，新しい肥料はすべての農場経営者に力を貸した」[6] として，肥料について論ずる。その結論部分を紹介しておこう[7]。

> グアノ・リン酸肥料・アンモニア肥料の利用が，旧来の作付け慣行に徹底的に革命をもたらした（revolutionised）。それは農産物のみならず，排水設備にも刺激を与えた。肥料と排水設備はお互いに作用・反作用した。肥料は排水設備［の敷設］を奨励した。両者は一緒になって，農場経営者がより多くの家畜を飼養することを可能にし，土地に最も多く投ずる者が最も多く得る者になるという教訓を教えた。肥料は，慈善と同様に，与える者と受け取る者に等しく福音となる。

この章の結論部分は，プロザロウの農業革命を理解するのに欠かせないので，いささか長文ではあるが訳出しておこう[8]。

> 戦時の高騰した価格は，わが国の農業に永続的な利益をもたらさずにはすまなかった。ノーサンバランドの農業史が，暗鬱な時代におけるこのより明るい面を力強く例証する。当時のもっとも熟達した進取の農業家で，北部地方のBlack Princeたる，ディルストンのジョン＝グレイは，この変化において顕著な役割を果たした。1785年生まれで，父親の死によって財産管理に就くことになったかれは，農業革命（the agricultural revolution）のまっただ中を生き抜いた。かれの父親がグレンデイルに腰を落ち着けたときには，平原は野生のエニシダの茂みであった。かれは斧をとり，辺境の住民同様，農業を始めるための土地を切り開いた。チェヴィオツの牧夫は凶暴で陰気であり，住民たちは無教養で野蛮であり，充分な衣服もままならない者たち，と当時は評されていた。その地方一帯は，道路も道標もなく，全く囲い込みされていな

5）*Ibid*., p.95.　引用文の［　］内は國方による補足であり，以下同じ。
6）*Ibid*., p.96.
7）*Ibid*., p.100
8）*Ibid*., pp.102-103.

かった。牛は野生のエニシダの茂みの中で何日もゆくえ不明になった。しかし，その土壌の質――その地の地主たちには，略奪的に生産するか飢えるか，どちらかしかなかったのだが――は，技術や事業意欲や勤勉さを惹きつけるものだった。カリ兄弟（Messrs. Culley）と同様の性格の人々たちは，肥沃な谷間（vale）に定住し，かれらの気力充実した農業によって，やぶの荒れ地であった――豊かなTill valeと同様である――地方全域に革命をもたらした。かつては単なる休閑地にするか，雑草で成長が抑えられた豌豆を産出するだけだった土地の価値は，カブと人工の牧草の利用によって４倍とはいわないが，倍増した。農業で得た金は，荒蕪地の開墾に熱心に再投資された。ゆったりとした間取りの建物が建てられ，新しい道路が敷かれ，唐竿では増産に対応できないので，水ないしは馬力を用いた脱穀機が導入された。フランス革命の戦争のあいだは利益が急激に増大し，それとともに土地に対する競争と地代が上昇した。長期の定期借地が提供され，大農場が提供され，土地は一片たりとも利用されずにおかなかった。耕地を得るために大きな石が掘り出され取り除かれた。湿地は干拓され，遮るもののない土地は囲い込まれた。物価の下落は，地代の割引や借地農の破産，所有権や占有権の移転をもたらした。しかし，前例のない繁栄によって刺激を受けた高い水準の耕作は，維持された。増大した生産が高価格の替わりを果たしたが，その増産は，肥料や排水設備，下層土耕作や科学と実践との結合によって生じた諸成果，これらによってもたらされたものである。

同じような変化は，ほとんどの州において指摘することができる。もう１つの事例で十分であろう。1848年の借地権に関するピュジィ（Pusey）委員会で，ある参考人は，リンカンシァにおける改良された農業の生産物増大とはどんなものか，と問われた。かれはつぎのように回答した。「その生産増大とは，ほとんど無の状態からエイカ当たり32～36ブシェルの小麦生産にいたるものであった。以前はせいぜいウサギの飼養場にすぎなかった。たった35年ほど前までは。」

18世紀末から19世紀前半にかけて，これまで荒れ地にすぎなかった土地が切りひらかれて，カブや牧草を利用することで豊かな生産地になっただけでなく，ナポレオン戦争期の農産物の価格高騰によって耕地の拡大が進んだ。戦後の農業不況期になって価格が下落しても，新たな肥料の投入や暗渠排水の敷設などによる生産の増大によって乗り切る方向に進んだ，というのがプロザロウの認識であったといえよう。

Ⅲ　*English Farming Past and Present*

前節では，プロザロウが19世紀末の時点において農業革命をどのように認識していたのかを検討してきた。本節では，農業革命研究にとっては最も重要な文献の１つといえる『イギリス農業 過去と現在』を繙いてみよう。現在のイギリス農業革命の研究は，ここに始まったと評価しても過言ではない。その著者の執筆動機が「序文」で２つの信念として鮮明に語られている[1)]。

1）Prothero, *English Farming Past and Present*, Longmans, Green, and Co., 1912, p.v.

１つは，少数の者が農地を所有していることが，いつの日にかイングランドをして土地国有化――それは，土地所有がより平等な原則に基づく国々では，すべての形態の私的財産権を破壊するものとして反駁されるものであるが――の温床にするという点である。もう１つは，ふさわしい産地のふさわしい土地でふさわしい人による農民所有権の，それ相当の増加は，社会的にも，経済的にも，農業的にも有利だ，ということである。

明らかに，これらは農業革命によってもたらされた状況に対する，プロザロウなりの危機感の表明であり，それに対する処方箋であろう。この状況認識とその処方箋の問題について吟味することは別の機会にとっておくことにし，ここでは農業革命との関連で重要なかれの認識を紹介しておこう[2)]。

大きな経済的変化は，製造工程の細部における小さな変更から生じた。同じような変化が，農業慣行におけるほとんど気づかないいくつかの変更によってよく説明しうるだろう。たとえば，カブの耕地栽培の導入は，繊維用機械の導入と同じぐらいに，まさに社会革命の生みの親であった。『イギリス農業の先駆者たちと進歩』の，そしてより一層詳細にではあるが，『イギリス農業 過去と現在』の主要な目的は，つぎの点を示唆することにある。すなわち，国民的な需要の圧力の下で，農業技術の進歩や新たな方法の採用が，そして新たな資源の適用や新たな用具の発明が，農村社会の旧来の諸形態を解体し，それらを現今の姿に鋳込む強力な装置であった，と。

引用文における「農業慣行におけるほとんど気づかないいくつかの変更」として，プロザロウがカブの耕地栽培をきわめて重要な要素として認識していたことは，改めて述べるまでもない。ベケット（J.V. Beckett）は，プロザロウの農業革命論の特徴としてつぎの２点を挙げる。１つは，1760年よりのちの議会エンクロウジァ運動の強調であり，もう１つが，「新しい作物，とりわけカブとクロウヴァの採用と，新しい輪作や機械の採用，そして改良された家畜の育種方法の採用」である，と[3)]。

しかしながら，さきの引用文において注目すべき点は，農業革命期に進行したのは旧来の農村社会が解体されて，新たな農村社会に鋳直された，との認識である。こうした認識こそが，上述の土地所有にかかわる危機感を醸成したものと考えられる。つまり，プロザロウのイギリス農業革命観では，旧来の農村社会が破壊されて，土地が少数の者に集積され，その結果土地所有権の土台が動揺を来すことになるが，その農村社会の解体をもたらしたものが，農業技術の進歩や新たな方法の採用であり，新たな資源の適用や新たな用具の発明であった，との理解ではなかろうか。この点について，もう少し検討を加えていくが，その前に，カブの栽培につ

２）*Ibid*., pp.v-vi.
３）Beckett, J.V., *The Agricultural Revolution*, Historical Association, 1990, p.3.

いてどのように言及しているのか，いま少しみておこう。

エリザベス時代の農学者について検討するなかで，プロザロウは，「グージは，単なる翻訳者としてではあるが，イングランド農業に革命をもたらしたカブの畑での栽培について提言した最初の著述家である（強調点，國方）」[4] と評価する。また，スチュアート朝時代の農書の紹介のなかでも，「根菜・クロウヴァ・栽培牧草がその後，イングランド農業に革命をもたらした。しかしその利用が一般的になるのは１世紀以上も後のことであるが（強調点，國方）」[5]，と述べており，カブ栽培が農書でどのように言及されているかを検討する一方で，その普及には時間がかかるとの認識を示している。

それはさておき，プロザロウの危機意識とかかわる問題についても検討しておくと，18世紀の農業に関してつぎのように述べる[6]。

> 18世紀が進むにつれて，とりわけジョージ３世即位後にイングランド農業が経験した大きな諸変化は，大まかに言って，ジェスロ＝タルやタウンゼンド卿，ディシュリのベイクウェルやアーサ＝ヤング，そしてノーフォクのコウク［らの貢献］と同一視できる。……（中略）……これらの先駆者が創始し，教示ないし範例を示した諸改良が，イングランドをして，ナポレオン戦争の試練に対応せしめ，追加の課税に耐えせしめ，あたかも手品のように陸続として登場した巨大な工業中心地に食糧を供給せしめた――しかも他国からの食糧供給が期待できないときに――のである。この農業上の前進は，個別の占有が旧来の共同耕作の制度に取って代わることなしには不可能だった。しかしこの必要不可欠の変革を遂行するに際して，農村社会には激震がもたらされ，その全体的な諸条件が革命的に変えられた。農民の土地からの分離，共同用益権者と開放耕地農民の絶滅と，結果としての小規模自由保有者の絶滅は結局のところ，わが国が，工業人口にパンと肉を供給するかわりに支払った大きな代償であった。
>
> 荒れ地の開墾も，開放耕地農民の分解も，共同用益地の私有化も，新規のものではない。過去３世紀のあいだ，一般的にはエンクロウジァとよばれるこれら３つのプロセスは，異なる進行速度であるがどれも進行していた。しかし，1760年から1815年の期間は，それぞれのプロセスが，部分的には穀物価格の上昇から，部分的には結果としての地代の上昇から，部分的には増大する人口圧力から，部分的には農業改良から，計り知れない刺激を受けた。囲い込みに対する賛否の論争はいまだ続いていた。しかし，賛成派が優勢になりつつあった。18世紀前半の半世紀に，エンクロウジァ唱道者によるこの問題にかかわる２つの顕著な貢献があったのに対して，反対派による重要な寄与は１件にすぎなかった。

プロザロウによれば，18世紀に工業化の進展とそれに伴う工業人口の急激な増大に対応するには農業上の諸改良を導入する必要があったが，その前提として囲い込みが必要不可欠だっ

4）Prothero, *English Farming Past and Present*, p.100.
5）*Ibid*., p.108.
6）*Ibid*., pp.149-150.

た，という。しかしいま訳出した文章については，多くの批判がおそらく浴びせかけられるであろう。よく知られているように，農業改良を創始したのはタウンゼンドとかコウクといった大地主ではない，といった点については，微に入り細に入り検討が加えられている[7]。あるいはまた，小農民の消滅といったことについても，厳しい指弾が加えられている[8]。したがって，紹介文の細かな事実認識については問題があるということは否定することはできない。

さらにいえば，農業上の諸改良を誰が創始したのか，あるいは一番最初に導入したのか，といった点を究明することは歴史研究の重要課題の１つには違いないが，しかしより関心を向けられるべきは，どのような人たちによって受容されていったのか，という点であろう。この点について，プロザロウはつぎのように述べている[9]。

> スコットランドであれイングランドであれ，開放耕地農民や任意保有農，あるいは数世代生涯保有農が耕作方法の変化の口火を切ることはありそうもない。また，小規模自由保有農がかれらの御先祖様のやり方に対して実験的な試みを加えることを期待するのも同じように無益なことだ。そうした実験は，1シーズン［の失敗］だけで，かれらを破滅の瀬戸際に立たせるだろうから。両国ともに，大土地所有者こそが18世紀の農業革命の先頭に立ったのであり，一層大規模な農場経営者こそが諸改良を最初に採用した者であった。両階級ともに，土地がかれらの資本にとって最も利益の上がる投資先であることを知っていたのだ。……（後略）……（強調点，國方）

と指摘しつつ，一方でつぎのように述べている[10]。

> 1760年までは，増大する人口の圧力はほとんど感じられていなかった。科学的農業の商業的な優位は，1790年においてさえ，イングランドの大多数の地主に改良農法の採用という賢明さを確信させるほどには，明確に確立されていたわけではなかった。
>
> この動向の比較的ゆっくりとした進展は，1760年以前と以後との，エンクロウジァ法令制定数の変動によって例証される。……（後略）……（強調点，國方）

7）*English Farming Past and Present* の 第 6 版（Frank Cass, 1961）で，G. E. FussellとO. R. McGregorが「序説」においてプロザロウ（当時はアーンリ卿と呼ばれるようになっている）の説について詳細に批判的吟味をおこなっている。また，Mingay, G. E., *Agricultural Revolution: Changes in Agriculture, 1650-1880,* Adam & Charles Black, 1977でもプロザロウの叙述について検討が加えられている。個別には，Parker, R. A. C., ‘Coke of Norfolk and the Agrarian Revolution’, *Economic History Review*, New Ser., Vol.8, No. 2, 1955; Riches, Naomi, *Agricultural Revolution in Norfolk*, Frank Cass, 1937（1967）を参照のこと。

8）Johnson, Arthur H., *The Disappearance of the Small Landowner*, with an Introduction by Joan Thirsk, Merlin Press, 1909（1963）.； Wade Martins, Susanna & Tom Williamson, *Roots of Change: Farming and the Landscape in East Anglia, c.1700-1870*, The British Agricultural History Society, 1999.

9）Prothero, *English Farming Past and Present*, p.161.

10）*Ibid*., p.161.

この後，エンクロウジァは，決して議会エンクロウジァだけではないとして，チューダ時代にまでさかのぼって囲い込みの諸形態について述べるが，その詳細を述べる必要はない。しかし，18・19世紀に，ある地域がほかの地域よりも議会囲い込みによって多くの土地が囲い込まれたのはなぜか，という問いとの関連で，カブへの言及がつぎのようになされている[11)]。

> 土壌がカブ・クロウヴァ・栽培牧草に短時間のうちに効果をあらわすような性質の場合もまた，新しい発見によって利益を得るべく囲い込まれた。これがノーフォクの軽土地帯での事態であり，ホウトンが記しているように，そこではカブ栽培が，17世紀末までに成功裡に導入された。この根菜の初期利用は，デフォウによって確認されていて，ノーフォクについてつぎのように述べている。「*イングランド*のこの地域は，カブを用いた羊のみならず黒毛牛の飼養と肥育が*イングランド*ではじめて実行された地として注目に値する」，と。
>
> 土地がこれらの改良の影響――この点はいまだ不完全にしか理解されていないが――をすぐには受けるように思われない場合には，囲い込みや土地の利用方法の問題は，主として費用の問題となった。最良かつ強い土地のみが，地力の枯渇なく開放耕地制に耐えることができた。18世紀の改良は，個別の占有者たちに，枯渇した土壌の肥沃さを回復する新しい手段を提供した。同時に牧畜における革命が牧畜業者に新たな誘惑を提供した。それほどよくもないか中等度の，疲弊した耕地は，生産量が減少しつづけたので，多くが囲い込まれた。穀物価格が低ければ，当座は耕地を草地にする方が，［費用が］よりやすく，だからより利益があがる。穀物価格が高ければ，個別経営下の耕作農業がもたらす利益率の上昇が，［囲い込みのための］立法と適合（legislation and adaptation）との多大な費用負担を賄うかもしれない。（イタリック，原文）

プロザロウは，カブ栽培が初発は家畜の飼料として導入されたというデフォウの叙述を肯定的に引用し[12)]，それと同時に，囲い込み後の土地利用は，穀物価格などのその時々の諸条件によって決まることを指摘する。その上で，「ハノーバー朝の時代に議会エンクロウジァによって最も影響を受けた地域は，イングランド東部・北東部・ミッドランド東部といった穀作地帯である」[13)] とする。州の面積に対して議会エンクロウジァによって囲い込まれた面積比率の上位15州のうち14州がこれらの地域に含まれていたからだ，と。それに対して，レスタシァなどではそれ以前に耕地から牧草地への転換を伴いながら囲い込みが進行したが，この時期は穀物価格も低迷していて牧草地への転換が最も利益があがるからだった，という[14)]。

しかし1760年以降は潮目が変わるが，それまでにタルやタウンゼンド卿による農業改良の試みは既に開始されていたのだ，としてタルとタウンゼンド卿の農業改良について強調し詳述す

11）*Ibid*., pp.166-167.
12）*Ibid*., p.166. プロザロウはノーフォクと記しているが，デフォウはサフォクの話として記している。Defoe, Daniel, *A Tour through England and Wales*, Vol.1, Dent & Sons（Everyman Library）, 1928（1948）, p.58.
13）Prothero, *English Farming Past and Present*, p.167.
14）*Ibid*., p.168.

る。プロザロウがタルやタウンゼンド卿の業績をひときわ高く評価していることはよく知られているので，ここでは要点だけ引用するにとどめよう。まずは，タルについて。[15]。

科学的農業の進歩において，タルはもっとも非凡な先駆者の一人である。小麦や根菜類の条播農法は，かれの死後何年も一般的には採用されることはなかった。しかし1733年公刊の *Horse-Hoeing Husbandry* に書き記された主要な原理が，耕作における農業革命の基本的な原理となった。（強調点，國方）

そしてタウンゼンド卿の業績については，つぎのように述べる[16]。

農業改良の要としてタウンゼンドがカブをあまりにも熱心に称揚するものだから，かれはカブのタウンゼンドなるニックネームを頂戴し，ポウプにホラティウス風イラストレーションの実例を提供した（Bk. ii. Epist. ii. 11. 270-9）。

さらに，家畜の品種改良についてもつぎのように指摘する[17]。

カブの助けなしでは家畜の単なる維持も，冬期と春期に困難な問題を抱えている。市場向けに羊や牛を肥育することは，多くの地区で実際上不可能であった。それゆえ根菜やクロウヴァや人工的牧草の畑作導入が，農業進歩の要であることを証明している。その導入は，農場経営者により多くの，より大きく，そしてより重量のある家畜を飼養することを可能にしたのであり，そのより多くの家畜はより多くの肥料をもたらし，そのより多くの肥料はより多くの収量をもたらし，そのより多くの収量はより多くの羊と牛を飼育することを可能にした。かくして18世紀末の希望に満ちた篤農家にとって，農業上の循環は，ほとんど無限でかつ常に利益を生む拡大が可能であるように思われた。

しかし耕作農業における最近の改良は，家畜が改良されるまで，最大限の利益を生み出しはしなかった。家畜の育種と飼育における必要不可欠な革命は，ラフバラに近いディシュリ居住の，レスタシァの農場経営者，ロバート＝ベイクウェル（1725-95）の業績であった。（強調点，國方）

この引用文は，大づかみに捉えると，1820年代の『大英百科事典』の記述と類似していて，

15）*Ibid*., p.169.

16）*Ibid*., p.174. ポウプは，Grosvenor家との比較で，“All Townshend's turnips”なる表現を用いている。Pope, Alexander, *The Works of Alexander Pope : With a Memoir of the Author, Notes* ..., Volume II, ed. by G. Crowly, London, 1835, p.279. 註において，「かれは，農業を愛好しており，カブ栽培の改良を格別に自慢していた」と説明されている。

なお，タウンゼンド家が単なる富裕なヨーマンから有力ジェントリへと変身し，大土地保有者として確立していく姿を描くものとして，新井由紀夫『ジェントリから見た中世後期イギリス社会』（刀水書房，2005年）第３章を参看せられたい。

17）Prothero, *English Farming Past and Present*, p.176.

『大英百科事典』ではつぎのように記述されている[18]。

> しかしこれらの作物は，別の観点からしても価値がある。クロウヴァとカブが導入される前は，夏場の自然に生える草と，冬季の粗末な干し草と麦藁とを除けば，家畜を飼養するものは何もなかった。とりわけ冬が長くて厳しいこの島の北部では，半年ほどは牛と羊が飢えないようにすることはほとんどできなかった。もっとも順調な状況下にあってでさえ，12月から6月までは食肉はほとんど市場に出荷されず，出荷されたとしたら，大方の消費者が支払うことができないような値段であった。それ故，牛と羊のより早い生育と，年間を通しての定期的な市場への供給とは，主としてカブとクロウヴァに負っているのである。耕作地で飼養される家畜頭数のとてつもない増加のみならず，数名の著名な農業家の熟達した試みによって，いくつかの品種については改良が完璧の域に達している。……（後略）……（強調点，國方）

さらに附言すれば，『大英百科事典』でも，この記述の後，ロバート＝ベイクウェルらの品種改良の業績とか，イギリスへのメリノ種の導入とその改良とかが述べられている。この点でも，相似通った構成となっている。もちろん，現在の研究ではベイクウェルの役割について批判的な叙述もみられるが，全体としては，牛や羊の品種改良がベイクウェルらを中心として推し進められたのは否定しえまい[19]。

つぎに「革命」に遭遇するのは，つぎのような文脈においてである[20]。

> これまでは，農村人口のゆっくりとした増大が，生産増大の唯一の実際的な誘因であった。しかし18世紀末に近づくにつれ，ワットやハーグリーヴズ，クロンプトンやアークライトなど機械に関する天才たちが，革命的な早さで社会の外観を変化させ始めていた。人口は，南部から北部へ，混雑した工業都市に大挙して移り住みつつあった。農産物に対する巨大な市場が出現し始めていた。これまでは，単純きわまりない生産用具が用いられていたので分業（divisions of employment）はほとんど存在しなかった。紡糸工，織布工，繊維工，鉄工，手工業者は，かれらの特定の製造業と農耕とを結合させていた。しかし，製造業の急速な発展は，製造業の農業からの完全な分離を惹き起こした。手工業への機械の適用は，社会編成上の革命を完成させた。分業は経済的必然になったのである。農場経営者と製造業者（manufacturer）とは互いに依存するようになった。自給農業は時代遅れで投げ捨てられた。工業と同様，農業は，家内産業であることをやめつつあった。両者ともに商業的な基盤のうえに組織化されねばならなかった。（強調点，國方）

18）*Encyclopaedia Britannica*, 6th ed. Vol.I, p.304. 初期の『大英百科事典』における農業に関する記述を分析した拙稿「『大英百科事典』にみる19世紀はじめのイギリス農業」（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第9号，2012年）を参看されたい。

19）家畜の改良については，Trow-Smith, Robert, *English Husbandry: From the Earliest Times to the Present Day*, Faber & Faber, 1951, esp., Chap.9. New Stock; *The Agrarian History of England and Wales*. Vol.VI: 1750-1850, ed. by G.E. Mingay, Cambridge University Press, 1989, Chap.4.

20）Prothero, *English Farming Past and Present*, p.205.

この文章は既に訳出した1888年の『イギリス農業の先駆者たちと進歩』にもほぼ同じ文章で利用されていたものである。製造業者と職工といったような語句のちがいなどが認められるし，『イギリス農業の先駆者たちと進歩』では，農工分離以前，農民たちがいかに自分たちで必要な道具を作っていたのかを細々と描写している。こうした相異は認められるにしても，両著における主張の趣旨は同一である。18世紀後半からの急速な工業化が，工業と農業との分離をもたらした，ということである。プロザロウにとっては，農工分離という現象が18世紀末からの農業問題にとって枢要な意味をもっていたことが指摘できる。

そして，この農工の分離と並行して進行したのが，農業におけるいわゆる「両極分解」であり，ここでも，産業革命の影響が指摘される[21)]。

> 1780年から1813年までの30年間に，産業革命――それは農業においては，新しい農法と新しい精神に表明されているが――は，農村生活に２つの対極的な影響を及ぼした。広範囲に及ぶ変化――それは国家的な危急の事情によって正当化されたし，要請されさえした――が，もたらされた。産業において資本家的製造業者が，小親方職人や家内工業者を駆逐したのと同様，農業では，小規模占有者を犠牲にして土地が大規模保有地にひとまとめにされた。工業も農業もともに資本の所有を必要とする事業となったのである。製造業（trade）であれ農業であれ，資金なくしては雇用主になる見込みはなくなった。しかし，土地所有者と大規模借地農には前例のない繁栄をもたらしたその同じ変化が，ほかの原因と一緒になって，農村人口の残りの人々をほとんど比類のない悲惨な状態に追い込んだ。……（中略）……しかし物価の高騰は，土地を所有も占有もしていない労働者に，埋め合わせをする何らの利点をもたらしはしなかった。逆に，かれらは，すべての生活物資に対してより多く支払うのに，生活費の上昇に十分見合う賃金の上昇は見られなかった。（強調点，國方）

一方での資本家的借地農経営の進行とかれらや大土地所有者の繁栄，他方での小規模農民の農業労働者への転落と貧困という，この「両極分解」をもたらした一端は，農地革命にあった。この点について，つぎのように指摘する[22)]。

> 16世紀と同様，18世紀においても，「囲い込みは家畜を肥えさせ，貧乏な人々をやせ細らせる」というのは，部分的には真実である。
>
> 農村社会の構造は，進行中の農地革命（the agrarian revolution）によって，その根幹に至るまで影響が及ぼされた。飢餓の縁に立つ大群衆，工業の中心地に蝟集し始めた大群衆が，食料を求めて大声を上げていた。農業上の技術改良が試されたが，それは，近代的な生産方法への拘束さえなかったならば，パンや食肉に対する新たな需要をみたすことを約束するものであった。まさにこの観点から，農業専門家は，進歩への中世的な障害物の除去と，耕作可能な最後

21）*Ibid*., pp.290-291.
22）*Ibid*., p.291.

の１エイカまで耕地に加えることを要求する点でほぼ一致している。開放耕地の農場が分解され，放牧共有地が分割され，荒蕪地が耕作地にされるにつれ，農村の景観は変わった。囲い込み運動は，さまざまな理由で攻撃されてきた。ヨウマン層，厳密な意味で言えば自作農（farmer-owner）の消滅;農場の独占，言いかえれば，数多くの保有地のたった１つの占有地への統合；農村の過疎化；貧しい人々に加えられていると主張されている物質的および精神的な損失；これらが囲い込みの影響だとされている。

この指摘ののち，囲い込みに関する論争について詳述されるが，ここでは「農地革命」が用いられている箇所に限定して紹介する[23]。

1790年以降は，開放耕地農民や共同用益権者に加えられた道徳的・社会的被害以外には囲い込み運動に対する反対の声は上げられなかった。経済的な利得が認められた。個別的な占有が，科学的かつ実用的農業の，そして拡大した生産の媒介者として，共同用益に服する耕地に勝ることを証明した。卵や家禽の供給は減ったかもしれないが，パンや食肉のより大きな供給によってはるかに埋め合わせされた。必要性の強力な圧力下，牧草から耕作の拡大へという反動が始まったとき，廃村や雇用不足といった［囲い込み反対派の］論調は力を失いはじめた。これらの動向で囲いこみ運動の擁護論は非常に強められた。しかし同じ時期に，農地革命の社会的な悪影響が急速に正体を現してきて注目を集め始めていた。それらの悪影響は，産業上の諸変化と救貧法の施行によってより一層強化されて，土地に対する支配権を失ってしまった数多くの開放耕地農民や小屋住み農や共同用益権者には破滅をもたらすものとなった。囲い込みに対する最も強力な反対論は，貧しい人々に対する物質的･精神的な打撃である。（強調点，國方敬司）

「農業革命」がつぎに出現するのは，北部地方のBlack Princeたるディルストンのジョン＝グレイの話の中であるが[24]，これは，『イギリス農業の先駆者たちと進歩』を紹介する際に訳出しておいたので，それを参看していただくことにし割愛することにする。

つぎに「農業革命」が使用されるのは，「ハイ＝ファーミング，1837-1874年」と題された第XVII章の冒頭である[25]。

ヴィクトリア女王の治世は，社会的・産業的発展がある段階から別の段階に移行しているただ中に始まった。農業の最前線で完全な変化が進行中であったが，それには，かつてその土地を占有していたか，あるいは耕していた階級の排除が必要であった。今世紀の最後の10年は，もう１つの移行期――かつての移行期と同じく，もう１つの農業革命（another agricultural revolution）を生み，農村社会の再度の崩壊に帰結するもの――のただ中を，農業家がいま現在通過中なのではないのか，という問題を提起している。

23）*Ibid*., pp.302-304.
24）*Ibid*., p.318.
25）*Ibid*., pp.346-347.

大雑把に言って，新しい治世の最初の37年は，繁栄と前進の時代，そして地代と利益の上昇の時代，……（中略）……であった。最高度の農業水準に関する限り，50年代以降，農業はほとんど前進を示していないが。他方，治世最後の26年は，地代下落や利益減少，耕作地縮小や資本漸減，そして土地改良への支出減といった，農業逆境の時代であった。

ヴィクトリア女王の治世の前半37年間は繁栄と前進の時代であったというが，プロザロウによれば，治世初年の1837年は，農業にとって困難な25年の只中にあったという。その原因についてはさまざまな説明が用意されていて，その１つが贅沢の増大という見解である。これは古くから繰り返し唱えられてきたもので，たとえば，1649年にブライス（Walter Blith）は，当時の農村の不況の原因を農場経営者の「ぜいたくな食事（high stomachs）」に帰しているという。また1816年にも，ロンドンのクラブの知ったかぶり（the wiseacres of the London clubs）が，農場経営者がクラレトからビールに戻り，その妻たちがピアノから鶏小屋に戻れば農業不況は終熄すると主張している，とプロザロウは皮肉たっぷりに紹介している[26]。

こうした主張は，相も変わらず1837年にも復唱されているが，もちろんプロザロウがこうした説明に与するわけがない[27]。

しかし困難の真相は，すでに述べた事情に存在していた。古い農業用具が故障したのに，新しいものが完成されていなかったのだ。１つの農業革命（An agricultural revolution）が進行中であったが，それでもなお，平和裡に経過していたので，その作動は完全なものであった。

1837年，農業（agriculture）は衰微しつつあった。農業技術（farming）は退化していた。重粘土質の土地は放棄されるか，荒れ果てており，みじめな状態であった。ありふれた放牧地が，はじめて耕起されたときには，その蓄積された大量の肥沃さの成分によって美事な穀物収量を生み出す。しかし，この富の貯蓄銀行はすぐに枯渇する。……（中略）……借地農と雇い人とのあいだに広まっていた不信感が，借地農と地主とのあいだに及んでいた。戦時の［特異な事情下の］地代を平和時の［通常の］利益から支払うことを約束していた者は，借地契約に慎重になった。少なくとも一世代のあいだ，地主と借地人とのあいだの信頼感は動揺を来していた。

この絵の明るい面は，この苦難のさなかに，新たな状況への地ならしが進んだことである。小規模のヨーマンや開放耕地農民，そして共同用益権者たちは，製造業の従事者たちを決して養うことはできなかった。……（中略）……かれらの消滅は，社会的な損失であった。しかし，それは経済的な必然であった。土地は，いまや，わずかでまばらな――耕作に従事するか一人で手工業に従事する――住民の需要を満たすために耕作されるものではなかった。イングランドが食糧に関して，自分自身の生産物に頼る――これは穀物法廃止後の約四半世紀のあいだつづいた状態である――かぎり，農業が自給自足的な家内工業から，利益追求型のパン・牛肉・羊肉製造工場に転換されることは必須であった。変化した諸条件が要求した規模の食料は，資

26）*Ibid*., p.347.

27）*Ibid*., pp.348-350. 借地農と地主との「信頼感」が何を意味するのかについては，米川伸一「ファーマーの歴史についての一試論」（『一橋論叢』第51巻２号，1964年）39-41頁を参照のこと。

本家的地主の投資と大規模借地農の聡明な事業によって大規模生産のために用意された土地においてのみ生産されうるものであった。

別の点でも，1813年から37年までの不況は好結果を生み出した。戦時の価格が維持されるかぎり，繁栄の年月が不精者に富をもたらし，怠け者が寝ながらに富を掻き集めた。繁栄の瓦解が，地主と借地人の活力と事業意欲に火をつけた。かれらは，費用を節約し生産量を増加させることによってのみ自分の立場を維持しえた。……（中略）……いまや度重なる落胆が，かれらに役に立つ教訓を教えた。法的干渉によって直接的な援助を得ることはできないし，援助が欲しければ自助努力をしなければならない，と。

その間，多くの有用な方面で立法が活発であった。農業革命および戦争と平和の影響が，労働市場を完全に混乱させていた。議会は産業上の諸変化に同調して，需要と供給の不均衡を是正し，資本と労働の関係を新たな状況に適応させた。1833年の工場法が職人たちになしたことを，農業労働者には1834年の救貧法がもたらした。困窮者の数は着実に減少し，救貧税は1832年の700万［ポンド］から1837年には400万［ポンド］にまで下がった。……（後略）……

少々長々と引用したが，1837年頃は農業不況の状態にあったが，それは古い段階から新しい段階への過渡期にあって，「１つの農業革命」が未完であったためだ，というのがプロザロウの認識であった。ここまでの引用ではその「農業革命」が何を意味しているのかは不明である。が，1837年までに，小規模経営が整理・統合され大規模経営が支配的になったこと，そして地主と借地農が自助努力によって生産活動を展開しなければならない時代になったことを認識するに至ったこと，これらが強調されている。この点を確認した上で，プロザロウがいう「１つの農業革命」とは何であったのかを探ってみよう。

18世紀末から19世紀はじめにかけて，農業改良会（Board of Agriculture）が農業の発展に枢要な役割を果たしたことはよく知られているが，1822年には解散する。これに代わって組織されたのがイングランド王立農業協会（Royal Agricultural Society of England）であった[28]。1838年に創立されたこの組織は，そのモットー“Practice with Science”で有名であるが，そのモットー通りこの時代に科学の力が農業を活性化する[29]。

科学と実践との新たな同盟は，豊かで直接的な成果を生み出した。科学は，数え切れないほどの多様さで実際の農業技術に力を貸した。化学者・地質学者・生理学者……（中略）……測量技師・統計学者たちは，農場経営者のリスクを低減し，［採用しうる］方策を増やした。蒸気［機関］と機械は，かれの労苦を軽減し，出費を減らした。かれの土地は遊ばせたままではないし，肥沃さが失われたままでもない。改良された用具がかれの労働をより安価にし，より迅速

28）この時代の農業科学については，差し当たって，並松信久「19世紀前半におけるイギリス農学の展開」（『京産大研究所紀要』12号，1991年）；同「19世紀中期におけるイギリス農学の展開」（『京産大研究所紀要』15号，1994年）およびGoddard, Nicholas, *Harvests of Change：the Royal Agricultural Society of England, 1838-1988*, Quiller Press, 1988を参照されたい。

29）Prothero, *English Farming Past and Present*, p.361.

にし，より確実なものにし，より効果的にした。新たな交通手段と増大した通信手段は新しい市場の門戸をかれに開いた。便利で広々とした建物が，崩れ落ちた納屋やすきま風が入る物置に取って代わった。獣医学上の技術が貴重な家畜の生命を救った。農業の一般的な水準が，以前ならモデル農場のみが達成しえた高みにまで急速に上昇した。……（中略）……面積拡大による農業の時代は終わった。資本増強による農業の時代が始まったのだ。

その科学による農業への具体的な貢献は，それでは何だったのか[30]。

検討中の期間で農業の進歩への最も顕著な貢献は，排水設備の拡充，人工肥料の発見，家畜飼料の購入増大，農業用具の改良，新たな着想と発明のより迅速な受容であった。そうした前進は，荷馬車の時代には不可能であった。鉄道によって，農場経営者が売らねばならないもの，あるいは買いたいものすべて――穀物と家畜，用具，機械，肥料，オイルケーキ，信書と新聞，そして人間そのもの――が，より迅速かつ低廉にあちらこちらへと運ばれた。

これらの成果として1850年代と60年代の繁栄が語られる[31]。

“60年代”は，大陸とアメリカでは戦争状態にあったが，イングランドは平和を享受した。季節は一様に良好だった。収穫は，1860年を除いて，良か，良好，あるいは豊作だった。1854年の小麦栽培面積は，ローズの見積もりによると４百万エイカを上回るに到っている。穀物や肉や酪農製品の輸入は，国産に取って代わるものではなく，補完するものだった。……（中略）……地代は急速に上昇した。しかしそれでも農場経営者は儲けをあげた。保有地は拡大され統合された。農場経営者の居宅（farmhouse）が労働者の小屋になった。機械の取引が活発に続いた。蒸気機関に対する期待は高かった。莫大な，そして，その後明らかになったように，過剰な資金が農場の建物に費やされた。排水設備が広く施され，いまや農業の一般的な水準は，1837年の農場経営者のうちの最良の域に急速に到達しつつあった。収穫高は，これまで到達したことがなかった限界に達し，未知の世界について予言しうるかぎりでは，この収穫高は超えられることはないであろう。

1853年から1874年までのあいだ，イングランドでは酪農における改良にはほとんど注意が払われなかった。しかし，家畜の改良はすばらしく，かつ継続的だった。……（中略）……1866年と1874年のあいだに，グレイト＝ブリテンの牛の頭数は５百万未満から６百万強に上昇し，羊は1874年には３千万頭をこえるまで増えた。頭数の増大だけではない。平均的な質も大いに改善され，良質の羊と牛が広く供給された。

以上，検討したところからすると，プロザロウがいう「１つの農業革命」とは，ハイ＝ファーミングとよばれるイギリス農業の１つの到達点そのものだったといえよう。もちろん「ハイ＝

30）*Ibid*., pp.361-362.
31）*Ibid*., pp.371-373.

ファーミング」とは何か，という問題はある。たとえば，19世紀半ばのイギリスにおいて最も活躍した農業家の一人，ピュジィ（Philip Pusey）は，1842年の論文で，オイルケーキを使用する家畜の飼育を“high feeding”，“high farming”とよび，従来の麦わらによる飼育を“old system of low farming”とよび，両者を対比させている[32]。かれは，論文全体としてはわれわれのいう「ハイ＝ファーミング」について語りながら，“high farming”の適用にあたってはきわめて限定的に使用していたのである。しかし，1849年のケアード（James Caird）の著書では，「ここ数年，大変な成功ときわめて有利な結果を伴って実施されている農業システム」として“high farming”が紹介されており，世紀半ば頃には，現在とほぼ同じ用法となっていた[33]。

Ⅳ　結語

プロザロウの「農業革命」あるいは「農地革命」について検討してきた。この検討から，何を学ぶことができたのか，整理していくが，第１に，われわれが「第一次エンクロウジァ」とよぶ中世末から近世初期にかけての囲い込みを，かれは，『イギリス農業の先駆者たちと進歩』では“an agricultural revolution”として，「自給自足農業から利潤獲得の農業への変化」，「共同所有から個別所有への変化」をもたらすものとして重視していた。この用法は，わが国にあっては小松芳喬氏や新井嘉之作氏らが「第一次農業革命」として考証されてきたことと軌を一にする[1]。しかし，プロザロウのばあい，この「農業革命」は『イギリス農業 過去と現在』では放棄されていることは指摘した通りである［本稿３頁参照］。

つぎに指摘できるのは，かれの農業革命のとらえ方が，きわめてトムソン（F. M. L. Thompson）のそれと酷似していることである。プロザロウが，18世紀半ば以降から19世紀はじめにかけての変化を端的に「18世紀の農業革命」として叙述する一方，「ハイ＝ファーミング」を「もう１つの農業革命」として分析していることは，つぶさに検証してきた通りである。この「農業革命」の把握は，まさにトムソンのそれとほぼ同一であると言ってよかろう。トムソンは，３段階の農業革命論を主張する中で，18世紀後半から19世紀初頭にかけての第１段階の農業革命を基本的に農場内で完結する農法の展開であったとする。それに対して，第２段階の農業革命は1815年から始まるもので，その核心はこれまでの「閉鎖循環システム（closed-circuit system）」を打破することにあった，とする。この第２段階の農業革命では，金肥としての骨

32）Pusey, Ph., ‘On the Progress of Agricultural Knowledge during the Four Years’, *Journal of the Royal Agricultural Society of England*, Vol.3, 1842, p.205.

33）Caird, James, *High Farming, under Liberal Convenants, the Best Substitute for Protection*, Edinburgh and London, 1849, p.1.

１）小松，前掲書および新井嘉之作『イギリス農村社会経済史』（御茶の水書房，1959年）181頁以下を参照のこと。

粉やペルー産グアノなどの購入，あるいは飼料としてのオイルケーキやトウモロコシの購入が拡大するとともに，排水設備や農場施設の拡充が進むことを指摘している。そして第３段階は，第一次世界大戦期以降で，人間労働に代わる機械の導入と，従来とは比較にならない肥料の投下による連作の実現を特徴としている，と指摘する[2)]。この第３段階は別として，第１段階と第２段階については，プロザロウとトムソンの認識は，基本的にほぼ一致しているといえよう。

第３に指摘できることは，プロザロウの「イギリス農業革命」論は，イギリス産業革命と切り離しては説明できない，ということである。しかし，通常，プロザロウの農業革命といえば，1760年以降の議会エンクロウジァ運動の強調，および，カブやクロウヴァの採用，新しい輪作や機械の採用，そして改良された家畜の品種改良，といった点が真っ先に列挙される[3)]。

確かに，農業生産といった局面に限定すれば，プロザロウが上述のような点を強調していることは間違いない。しかしながら，プロザロウの「イギリス農業革命」について検討してきた印象では，繰り返し強調されるのが，産業革命の影響である。産業革命の進行とともに農業と工業との分離が進むと同時に，並行して農業における資本主義化が進み，一方での大土地所有と大借地農経営の形成，他方での没落農民の農業労働者化が進む，と。もちろん，こうした認識と説明の仕方については，さまざまに実証的な批判が加えられているのは事実であり，プロザロウの説を鵜呑みにするわけにはいくまい。

それでもなお，「イギリス農業革命」が，「イギリス産業革命」の影響のもとで進行したというプロザロウの認識自体は無視しがたい視点だと考える。細かな事実認識や説明の仕方はともかく，1760年以降の急速な人口増大と工業化に対応する中で，イギリス農業の産業としての純化と生産規模の拡大が実現したのは事実であろう。ウィルトシァにおいても毛織物工業における機械化が，農家，特に農業労働者の子女から紡糸作業という副業を剥奪し，これがまたかれらを困窮状態に陥れたこと，またこれまで農村部で営まれた作業も都市の製造業者の元で営まれるようになったことが報告されている[4)]。

19世紀に入ると，農場労働者に零細な地片が割り当てられる“Allotment Movement”がイングランド各地でみられるようになる。これも農業労働者をはじめとする貧困層の窮迫と社会的な動揺が起因となっている。大借地農経営が進行したウィルトシァ南部でも農業労働者の窮状を緩和するべく，零細地片での農業労働者によるジャガイモの作付けを借地農が許可した

２）Thompson, F.M.L., 'The Second Agricultural Revolution, 1815-1880', *Economic History Review*, New Series, Vol. 21, No. 1, 1968.

３）前節の註（３）および（７）を参照されたい。

４）Davis, Thomas, *A General View of the Agriculture of the County of Wilts*., London, 1881, pp.215, 219. 農業と工業との未分化な「二重経済」の様相についての具体的分析として，坂巻清『イギリス毛織物工業の展開――産業革命への途』（日本経済評論社，2009年）第７章「18世紀末ヨークシャー織布工の「労働リズム」」を参照されたい。

が，農業労働者の生活は最低水準に落ち込んでおり，農作業を円滑にこなすことができないほどの健康状態にあるからだ，と指摘されている[5]。

この問題にこれ以上深入りするわけにはいかないが，プロザロウが，農業革命と産業革命との連関を強く意識していたことを象徴する一節を引用しておこう[6]。

> さらにいえば，小農たち（peasantry）の勤勉さにとりわけ適応する土地をかれらに戻す運動は，かれらの正当な抱負を満足させるのに十分だっただろうに。かれらの記憶は頑強である。深く深く隠されているが，過去の農村生活の状況に関する漠然としていて，しばしば誤って理解されている言い伝えが農業労働者の心の奥底に潜んでいる。かれは，いま賃労働者として耕している土地を，かれの先祖たちは借地人として農場経営していたことを知っている。［しかし］かれは理解していないのだ。その変化は，農業と同様に工業にも多大な影響を与えた偉大なる産業革命（a great industrial revolution）のただの一部分にすぎないことを。（強調点，國方）

この一節は，19世紀末以降のイギリス農業の困難とその打開策について解説している箇所で述べられているが，その文脈はともあれ，小規模経営の没落が産業革命によって惹起された変動の一環にすぎないとのプロザロウの認識を簡明に示している。

『イギリス農業 過去と現在』の「序文」を紹介した際に触れたように，かれの関心は土地所有権の過度の集中と，それを農民による所有を増加させることでいささかなりとも緩和させることにあった。土地所有の集中は，旧来の農村社会が解体させられ，現今の農村社会に鋳込まれる中で形成されたのであり，それは産業革命の進行と連動して進んだ農業革命がもたらしたものだ，というのがプロザロウの基本的認識だった。

現在の産業革命像は，もちろんプロザロウの時代のものとは異なる[7]。従って，プロザロウのかかる認識についても，それをそのまま受容するわけにはいかない。ここで確認したいことは，プロザロウの事実認識や説明の仕方はともあれ，「イギリス農業革命」は「イギリス産業革命」と連動して進展していったという点である。プロザロウの「農業革命」説が，コウクやタルの業績を強調したり，カブやクロウヴァの栽培を強調したりしたといった点は，いわば些

5）Caird, James, *English Agriculture in 1850-51*, Kelley, 1852（1967）, pp.84-85.農業労働者の困窮については，Cooper, Jacqueline, *The Well-ordered Town: A History of Saffron Walden, Essex, 1792-1862*, Cooper Publications, 2000, pp.21ff, et al. この研究書でも分析されている“Allotment Movement”については，Burchardt, Jeremy & Jacqueline Cooper（eds.）, *Breaking New Grownd: Nineteenth Century Allotments from Local Sources*, Family and Community Historical Research Sciety Limited, 2010が全イングランドについてサーヴェイを行っている。伊藤栄晃氏が分析を進めているウィリンガムは，“Allotment Movement”でも重要な研究対象となっているようである。Burchardt & Cooper, *op.cit*., pp.30, 130 et al.

6）Prothero, *English Farming Past and Present*, pp.397-398.

7）「産業革命」「イギリス産業革命」については，馬場哲・小野塚知二編『西洋経済史学』（東京大学出版会，2001年）に収められた，小野塚氏の簡潔で核心を突いた学説整理を参看せられたい。また，そこに挙げられた諸論稿を参照されたい。

末な問題――というのは，言い過ぎであるが――である。そうした事実認識については修正・訂正すれば済むことである。それよりも，「産業革命」の一環としての「農業革命」というかれの基本認識こそすくい上げるべき視点だったのではないか。

従来の「イギリス農業革命」の検討が，農法の展開やエンクロウジァといった，いわばプロザロウの農業革命論の構成要素に集中することで，あれやこれやの主張がなされ，結局「農業革命」の概念自体が雲散霧消していったように思われる。無論，農法の検討やエンクロウジァの実証的検討が重要だということを前提にして話を進めているが，「イギリス農業革命」を研究するに際して，これまでの研究で欠落していたのは，「イギリス産業革命」との連関を問うことだったのではないか，と考えている。そうした観点から，プロザロウの「イギリス農業革命」論と今一度，正面から向き合うべきではないか，というのが本稿の主張であり，「イギリス産業革命」の一環としての「イギリス農業革命」を検討することで，新たな歴史像を提供できるのではないか，と考える。その具体的な内実については，今後の検討課題として残さざるをえないのではあるが。

最後に触れておきたいのは，第２点として指摘した，18世紀後半から19世紀前半を１つの農業革命として把握し，それ以降のハイ＝ファーミングをもう１つの農業革命として捉える２段階式の発展論についてである。トムソンが指摘するように，農場内完結の段階から農場外から資材を導入することで生産性を上げる段階へと，それぞれを１つの農業革命として理解することは可能である。しかしながら，毛利健三氏が夙に指摘しているように，未完であった19世紀はじめまでのイギリス農業革命をハイ＝ファーミングをもって完成させたとの理解の方が自然である[8)]。また，イギリス産業革命の一環という「農業革命」の捉え方からしても，自然ではなかろうか。

８）毛利健三『古典経済学の地平――理論・時代・背景』（ミネルヴァ書房，2008年）第６章。

＊本稿は，科学研究費基盤研究（C）「イギリス農業革命研究の残された課題：農業は人口増大にどのようにして応えたのか」（研究代表者：國方敬司，課題番号： 23530403））による研究成果の一部である。